ジョン・セクストン　ワークショップ
The expressive black and white print
（表現に富む黒白プリント）に参加して

畑　文夫

2003 年 10 月 28 日（火）～11 月 2 日（日）
カリフォルニア州　カーメルバレーにて

長期休暇が取れるのを幸い、自分の語学力を省みずにジョン・セクストンのプリントメーキングワークショップに参加しました。 案の定、講義の内容は数分の一も理解できない有様でしたが、それでも実技デモ中心の内容は刺激的で有意義でした。 延べ 20 時間以上の録音を聞き返しながら、できる限り記録を残しておくことにします。 但し、再現できるのは実技解説の内容が中心で、コンセプトなど抽象的な内容は理解が及ばなかったことをお断りしておきます。

カーメルへ．．．

10 月 28 日　**午後 5 時成田発 （ユナイテッド航空 UA852 便）、同日午前 9 時（アメリカ太平洋時間）サンフランシスコ着。 国内線に乗り換え、11 時 45 分　モントレー空港着。 午後 3 時ごろカーメルバレーのホテル Hidden Valley Inn 着。午後 7～11 時前までワークショップ。**

サンフランシスコ空港は良く晴れた朝。 若い入国審査官に「行き先はカーメル」と伝えると、「すばらしい所だ、よい旅を！」と挨拶してくれる。

国内線に乗り換え、モントレー空港までは 50 人乗りの双発機で正味 20 分ほど。 ワークショップ初日は午後 7 時開始のため、モントレーのアンセル・アダムス・ギャラリーに立ち寄ることにする。 海に近いギャラリーで暫く時間を過ごした後、タクシーを拾おうとしたが勝手が判らない。 やむを得ず近くのレストランで呼んでもらう。 モントレー市内からカーメルバレーのホテルまでは 4～50 分、メーターで$40。

午後 3 時、同室の天畠氏は先に到着しており、初対面の挨拶もそこそこに仮眠する。 山あいのモテルの設備はきわめて質素で、貴重品預かりもランドリーも、インターネット接続環境もない。

午後 6 時過ぎ、ホテルの食堂にメンバーが三々五々集まってくる。 軽食をとってから車に乗り合い出発。 自分、天畠氏(Terry)、スペインから来た Leonardo (Leo)という異邦人 3 人組は、退役軍人で立川基地にいたことがあるという Michael (Mike)の車に乗せてもらう。

セクストンの自宅兼スタジオはホテルから山道を約 20 分程登った斜面にある。 すっかり暗くなり、懐中電灯を持ってくるように指示された理由が判る。

ワークショップ　第 1 日目

午後 7 時、30 分ほどのオリエンテーションとセクストンの自己紹介。 火曜日の夜から日曜日の午前まで「こんなに長く話すのは自分が時間給だからだ。」

参加者 11 人が自己紹介と、宿題として持参した 10 点のポートフォリオから 3 点を説明。

次いでスタッフの紹介。 セクストン夫人でデンマーク出身の写真家アンヌ、 10 年来のワークショップ事務担当で詩人のローラ、最後にセクストンが自作の解説を行う。

・自分は 4×5 フォーマットと広角レンズ（75㎜）を好む。

・広角レンズは森で余分な樹木や枝などを画面に入れないために有効だ。

・樹を高く見せたり、被写体の大きさを強調するにはカメラアングルを低くとること。

White Boulder, Dead Horse Point　©John Sexton

この風景は夕暮れ時に TMAX100 で 16 分露出。 相反則不軌を考慮すればさらに二倍の露出時間でも良かった。 中央の岩には電池式のストロボ （これもアベイラブル・ライトだ！）を何回も当てた。

ワークショップ　第 2 日目

10 月 29 日　**8 時半開始。 午前中セクストン自作の解説。 昼前から暗室でプリントのデモ。夕食後に順番を抽選し、ポートフォリオ 10 点を見せる。午後 10 時 50 分終了。 二日目あたりが時差ぼけで眠い。**

セクストン自作の解説とテクニックの紹介：

・白樺（Aspen）の幹をメタリックに描写するため、トップライトの条件を選んで撮影し、1 号でプリントした。 号数を低くするとコントラストの低いプリントになると思い込んではいけない。

・印画紙はコダック・ポリマックス（マルチコントラスト、FB）を常用している。

・RC ペーパーはコンタクトプリントにだけ使う。

・全てのプリントはセレン調色を施す。（自分の暗室から、トーニングしないプリントは出さない！）

・ネガの濃度を増強するため、（部分的に）セレン調色することがある。

・撮影中はデータ（メーターの読み、ゾーン位置づけ、フィルム現像方法など）をマイクロカセットで録音するとよい。

「ネガ現像はサイエンス、プリントメーキングはアート。」

「写真は９０％の努力と１０％のインスピレーション。 実践、実践、実践！」

暗室デモ；

暗室は十数人が入っても充分な広さ。まず驚いたのは機材が殆ど日本製であること。

引伸し機： LPL　4×5　VC ヘッド（4 台）
レンズ： ELニッコール
タイマー： ラッキー

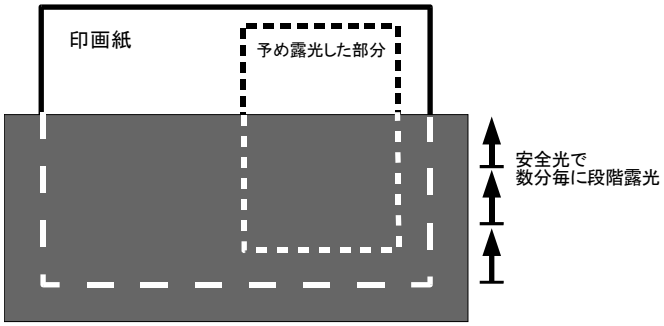
暗室内の壁と天井は白塗装だが、引伸ばし機の周囲だけは天井まで黒くしてある。また、引伸ばし機には徹底的に遮光対策が施されている。（ネガキャリヤの挿入溝には黒いマジックテープで「カーテン」が取り付けられており、また印画紙からの反射光を防ぐため、レンズマウント周りなどヘッドの下部は要所を黒紙で覆ってある。）

・ネガキャリヤは両面ガラス入りタイプを使う。（後で述べるように、本番プリントではかなり長時間点灯する。）

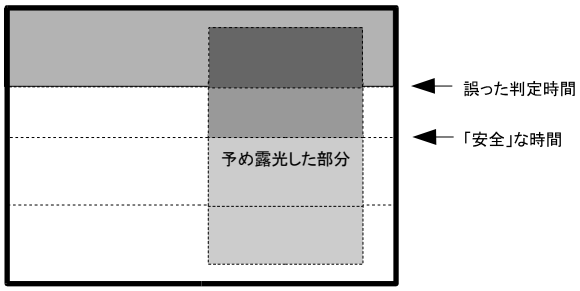
ニュートンリング防止にはテテナール社のアンチ・ニュートン・スプレーを上面ガラスに塗ると良い。（国内での入手可否は不明）

・ときどき安全光を確認すること。 未露光の印画紙を使うのは誤りで、部分的にゾーンVI程度の露光を与えてからテストする。 10～12 分程度はかぶらない様にしている。

・排水の処理は特別に行わず、「垂れ流し」だという。 意外であった。



↓ 安全光を消して現像

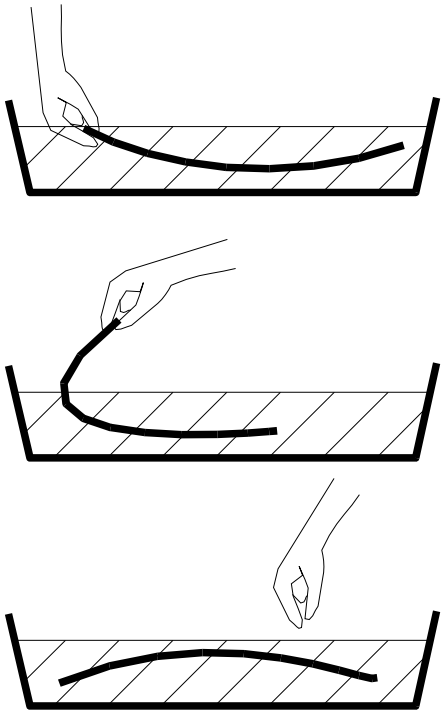


・試し焼きの方法： 印画紙を小片に切るのは時間の無駄で、プリントサイズでおこなう。 （全面 3 秒×2 回露光 → 一部を覆って 3 秒露光 → さらに一部を覆って 3 秒 → 以下繰り返し） まず低コントラストの印画紙から始め、仕上がりを見て必要なら号数を上げていく。

・現像液はデクトール1:2 希釈 2 分現像を常用。 初めは現像液の疲労が進むので、まず捨て現像（露光済みの失敗印画紙利用）を行うこと。

・ピンセットは一切使わない。 素手、又は薄手のゴム手袋を着用し、印画紙をバットから持ち上げて裏返すよう、コンスタントに撹拌する。 印画紙を折り曲げないように注意。

二枚現像する場合は背中合わせにする。

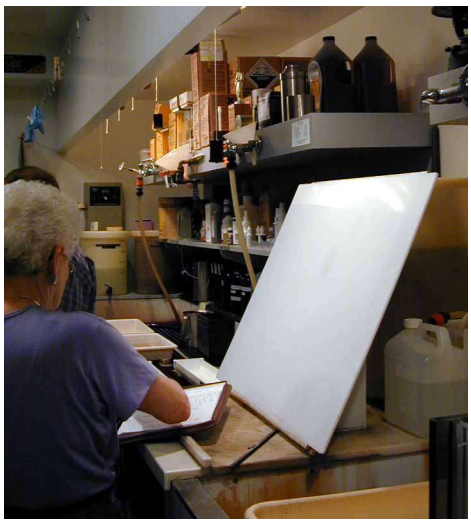


・第一定着液はコダック F6（指定時間 3 分）。 1 分定着後に水に移して一時保存。 後でまとめて残りの 2 分間定着する。（第二定着はプレーンハイポ）

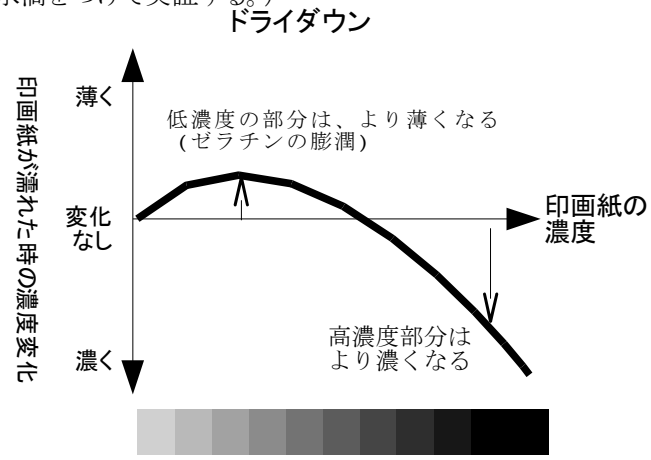
・ビューイング・ボード： 白色アクリル板に第二定着前のプリントを貼り、スクイーズしてから白熱電球で観察する。 ビューイング・ボードの照明は ISO100 でEV 6～7 程度、最大でも EV7 以下にすること。（グレーカードを置き、スポットメーターで測定） この程度の明るさだとドライダウンを考慮する必要がない（？）。 これは経験的なもので、理論的な裏づけはない。

・印画紙には蛍光染料が含まれているので、蛍光灯は不可。

・スクイーズするワイパーは、水洗完了後に使用するものとは区別すること。



・ドライダウンについて： 濡れた印画紙ではゼラチンが膨潤しているため、濃度の低い部分は銀粒子の密度が小さくなり、すこし明るく見える。（乾燥したグレーの印画紙に、部分的に水滴をつけて実証する。）



・ハイライトを基準にストレートプリントの露光時間を決め、シャドーは印画紙の号数で調整する。（LPL の VC ヘッドは、号数を変えても露光時間は変わらない。）

・ストレートプリントは、ためし焼きで読み取った秒数で露光する。 印画紙の裏面には、露光前にやわらかい鉛筆（お勧めは SANFORD DRAGHTING 02237）で号数、絞り、露光時間などのレシピを記入する。

・コールドライトでなければ間欠露光の必要はない。（LPL の光源はハロゲンランプ。 タイマーに所定の秒数をセットし、露光する。）

・ストレートプリントを現像、定着、仮水洗し、ビューイング・ボードに貼って焼き込みや覆い焼きを検討する。 焼きこみ、覆い焼きの時間は全体露光の 20～25%を基準にスタートする。

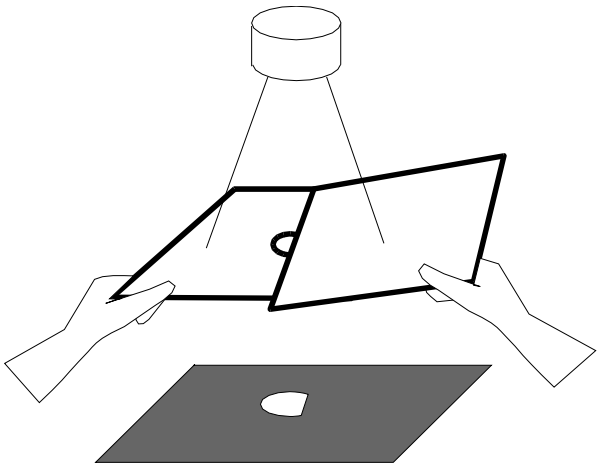
・イーゼルに白紙を挟み、ネガを投影しておよその輪郭を鉛筆でスケッチする。

・印画紙を小片に切り、スケッチを目印にしてイーゼルに並べる。 その上で焼きこみ、覆い焼きを行う。

・引伸ばし機は連続点灯。 1秒間隔に設定したメトロノームを聞いて秒数を数えながら、両手に持ったボール紙をシャッターにして主露光と焼き込みを行う。

・ボール紙は上面白、下面黒。 片方の紙には直径1インチ弱の穴があり、小部分の焼きこみも 2 枚を組み合わせて行う。

・覆い焼きは自転車のスポークに円形のボール紙を貼り付けた「普通の」道具を使う。



・定着、仮水洗を終えた印画紙片をビューイング・ボードにストレートプリントと並べて（又は重ねて）貼りつけ、焼き込み、覆い焼きの程度を決める。

・決定したレシピを露光前の印画紙裏に記入してから本番の露光、現像を行う。

・以上を納得できるまで、何回も繰り返す。

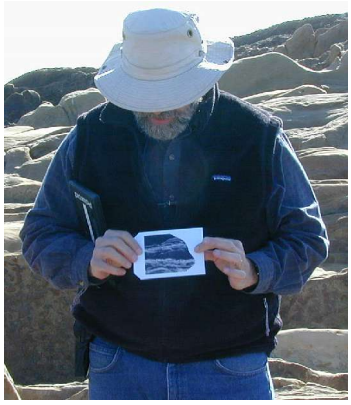
「Communicate with your materials. 材料との対話をすること。（印画紙や薬品の特性を把握しろ）」

・午後 8 時 50 分～ ポートフォリオ・レビュー （参加者の自作解説） セクストンとほかの参加者が批評とアドバイスを行う。 一人当たり 30 分程度。（当夜は 3 人）

ワークショップ 第 3 日目

10 月 30 日　8 時半開始。 ポートフォリオ・レビューの続き（2 人）。 昼前、Point Lobos へ出発、ピクニックランチ。 午後 5 時まで海岸で撮影指導。 レストランで夕食後、スタジオに戻り、ポートフォリオ・レビューの続き（2 人）。 9 時すぎに終了。

Point Lobos 海岸でポラロイドによる撮影デモ。



現像むらが多発するので、待つ間に十字を切ったり、拝んだり！

・一般に多い失敗は「露光不足・現像オーバー」である。 シャドーをゾーンⅣに位置づけること。（ゾーンⅢではディテールが出ない）

・中判カメラでは、標準、N-1、N＋1 現像用にそれぞれフィルムマガジンを用意する。

・蛇腹の繰り出しと露出補正方法 ・・・ 無限遠で蛇腹の長さが 8 インチの場合、11 インチまで繰り出したら 1 絞り明ける（ F 値の系列で覚える）。 長さ測定用に冠布の縁にメジャーを縫い付けておく。

午後5時日没。 Point Lobosも5時で閉鎖。

カーメルの和食レストラン「ロバタ」で夕食。 ここはアダムスが出版の打合せでよく利用したという。 クリント・イーストウッド（元カーメル市長）を見かけた。

ワークショップ　第４日目

10 月 31 日　　雨漏りの為に 8 時 45 分開始。 自作の解説、 ネガ現像の解説、暗室デモの続き （フラッシング、ブリーチ、セレン調色、ネガのセレン調色）。 ドライマウント、スポッティングのデモ（アンヌ）。 ポートフォリオ・レビューの続き。 午後 10 時 40 分終了。

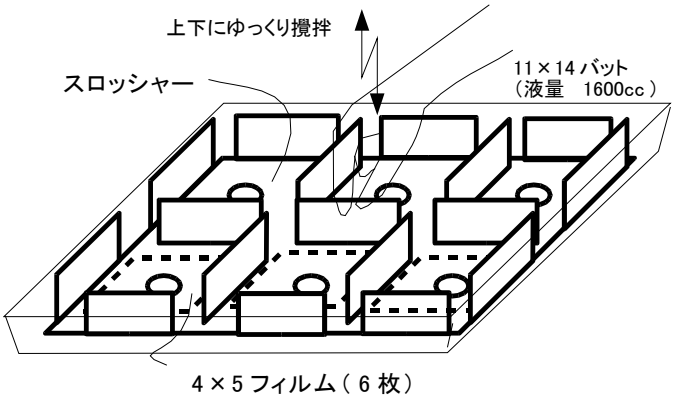
セクストン自作の解説： 火力発電所の写真（Places of Power より）。 タンクやパイプのメタリックな感じを出すため、12 分の露光中にストロボを何回も当てた。

調整現像： 光源が画面に入るような高コントラスト被写体（発電所、ダムの屋内、夜景など）のフィルムは Compensating Develop（調整現像）を行った。

（Places of Power の plate32 は　電灯が EV14、画面中央のパイプは EV1 であった。）

薄く希釈した Compensating developer（調整現像液）を使用し、撹拌をわずかに行う。 現像の進行に伴う生成物が高濃度部分の現像進行を抑制するため、低コントラストのネガが得られる。

調整現像を行うため、シートフィルム現像器具「スロッシャー」を考案した。 11×14 バットで、同時に 6 枚の 4×5 シートフィルムを現像できる。



T-MAX100 フィルムを EI 40 で使用。T-Max RS　1:15 希釈 （1600cc） 75° F （24℃） 8～11 分現像 （始めの1分はゆっくり連続撹拌、次の1分は 30 秒ごとに 5 秒、以降は2分毎に 10 秒撹拌） から試すこと。

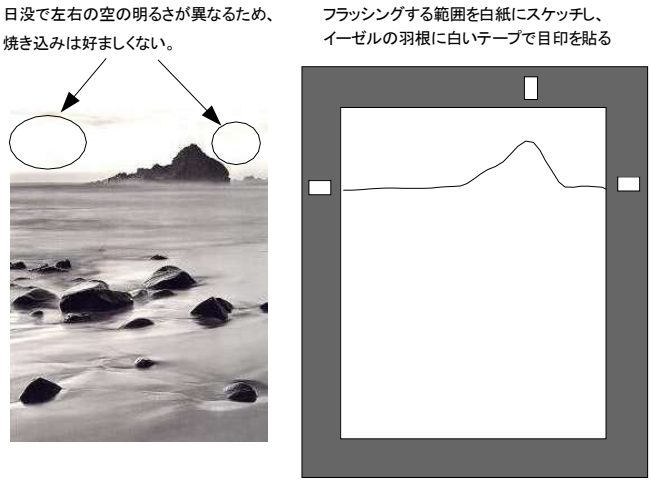
・昔のフィルムはゼラチンが厚かったため水現像が行えたが、最新のフィルムでは使えない。

・皿現像でバットをゆすって撹拌すると、波による現像ムラが生ずることがある。 スロッシャーを使えばその心配がない。

・フラッシングについて：　画面の左右で空の明るさが異なる場合などのように、空の濃度を上げたいが、焼き込みが好ましくない場合フラッシングを行う。 事前のストレートプリント作りを省略してはならない。

予め、均一なグレーのネガを用いてフラッシングの露光量をテストしておく。（試し焼きの要領で、わずかに濃度が乗る直前の秒数を求める。）

イーゼルに白紙を入れてネガを投影し、フラッシングする部分をスケッチする。（ロードマップを書く）　次にイーゼルの羽根に目印の白テープを貼る。



©John Sexton

主露光を行った後、ネガをフラッシング用に交換し、目印のテープを頼りに空の部分をフラッシングする。（フラッシングは主露光の後に直ちに行うこと。 間をあけると効果が変わる。）

ブリーチ（減力）：　白樺の枝など、覆い焼きの困難なハイライト部を強調するため、ファーマー減力液 （Farmer's Reducer　米国ではコダックの既製品が入手可能）でプリントの部分的な減力を行う。

第一定着・仮水洗済みのプリントをビューイングボードに貼り、筆で必要部分に減力液を塗る。 濃度の高い部分には効果が少ない。 画像の変化を見ながらホースで水を掛け、洗い流す。 金属を使った筆は変色するので不可、書道用が良い。 ブリーチが終了したら、第二定着とセレン調色を行う。

印画紙セレン調色のプロセス：

第一定着（コダック F6） 1 分
↓
ブリーチなど

水保管
↓
第二定着 （3分 連続攪拌）
↓
セレン調色
（効果を見ながら 3～5分 連続攪拌）
↓
HCA
（ハイポ・クリアリング・エージェント）
↓
水洗

処方:

第二定着液 （プレーンハイポ）
・チオ硫酸ナトリウム 2ポンド
・亜硫酸ナトリウム 1/4ポンド
・水 1ガロン

セレン調色液
・コダック ラピッドセレニウムトナー 50ml ※
・コダック ハイポ・クリアリング・エージェント
（HCA） 1000 ml

※ 印画紙の銘柄によって適する希釈率は異なる。 下記を参考に自分でテストすること。

コダック ポリマックス ファインアート	1+10
イルフォード マルチグレードⅣ	1+10
オリエンタル シーガル号数紙	1+20
フォルテ ポリウォームトーン プラス	1+30

・各種の銘柄を調色前後で比較する。
「フォルテは調色しないと使い物にならない！」

ネガのセレン調色: ハイライトを強調する手段として、ネガのセレン調色を行うこともある。 現像時間を延長するより効果があり、粒子が荒れることがない。 また必要な部分にのみ行うことが出来る。

ネガのセレン調色プロセス:

乾燥したネガは水で前浴
↓
プレーンハイポ （3分）
↓
セレン調色 （希釈率 1+1）
ライトボックスで効果を見ながら約5分
↓
HCA 2分
↓
水洗

ライトボックス（電池式）の上に調色液を入れたタッパーウエアを置き、効果を見ながら処理をする。

部分的に調色する場合:

ライトボックスの上に厚いガラス板を置き、濡れたネガの乳剤面を上にして置く。 ネガの水滴をレンズクリーニングティッシュで吸い取ってから、調色液を綿棒につけ部分的に塗る。（境界をぼかすように綿棒を動かす） 約5分後、ガラス板ごと水に漬けてネガをとり、HCA～水洗。

ネガの天井部分を調色

©John Sexton

ドライマウント、スポッティングのテクニック抜粋 （アンヌ）

ドライマウント前に印画紙を乾燥する。 4plyのボード2枚の間に乳剤面を下にして挟み、200° Fでプレス。 ドライマウントの時は乳剤面を上向きに入れる。

印画紙を切るカッターは、予めワックスペーパー（調理用）を切って刃を清掃すること。

スポッティングは画材の染料インク（銘柄Marshall 黒、灰、オレンジの3色）を数滴ずつ陶器のパレットに滴下して混ぜ印画紙の色調にあわせる。

筆はウィンザー＆ニュートンのシリーズ7、サイズは00か000号。 作業の照明はリング蛍光灯と電球を組み合わせたZライトが良い。

染料が熱で変色するため、スポッティングはフラットニングあるいはドライマウント後に行う。

染料をつけすぎたときは、精製水か、精製水で薄めたEdwal LFN（界面活性剤？）を綿棒につけて除去する。

染料が乳剤に乗りにくいときは紙でマスクを作り、ヤカンの湯気を必要部分に当てるとよい。

ワークショップ 第5日目

11月1日 **8時半開始。 参加者のネガとコンタクトプリント診断。（午後まで）**
暗室デモなど。 アンヌの写真解説。夕食後に景品の抽選！

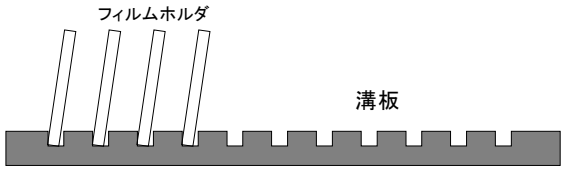
参加者のネガ、コンタクト、ワークプリントを一堂に展示し、一人ずつアドバイスを行う。

（私の作品へのアドバイス: アクロスはN-1現像すること。 コンデンサータイプの引伸し機ではコントラストの上げ過ぎに注意。 できれば拡散光源を使え。 レンズ下にVCフィルターを入れては画質が低下する。 コンデンサーの上に置くタイプを使え. . . etc ）

その他のヒント:

4×5ホルダーの清掃にはHEPAフィルター付のクリーナーを使うこと。 引き蓋を抜き、棒で叩いてゴミを落とす。

掃除したホルダーは、溝のついた板に立てておくこと。（ホテルのトイレなどでフィルムを交換する時のため、持ち歩いている。）



ホルダはZiploc（チャックつきポリ袋）に入れておく。

アンヌの作品解説: 4×5テクニカルパンをT-MAX developer現像。化石、花、岩などのディテールを強調する。常にT-MAX100フィルムでバックアップを撮る。

セクストン宅で夕食後、全員に抽選でプレゼントを配る。 スポンサーであるコダックの印画紙、現像薬品やその他の小物などを面白おかしく説明しながら手渡すリラックスしたひと時。

帽子のツバにクリップで留めた 「特製ハンズフリー・ビューイング・ファインダー」！

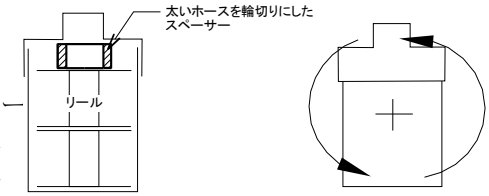
ワークショップ 第6日目 （最終日）

11 月 2 日　　8 時半開始。 自作の解説。 ネガ現像解説。 引伸し機のアライメント、ネガの整理方法など解説。 アダムスのプリント解説。

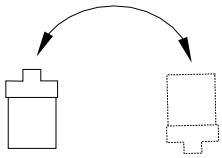
午後 1 時過ぎ終了、解散。

Places of power から、スペースシャトルの写真解説。

・ロールフィルム現像の注意： ステンレスタンクで現像ムラを防ぐには、すばやく（1 秒に 1 回程度）倒立→正立を繰り返す攪拌を行うこと。 現像液注入後は 20 秒連続、後は 30 秒ごとに 5 秒攪拌する。 リールがタンク内で上下するのを防ぐため、太いビニールホースを輪切りにしたスペーサーを入れる。

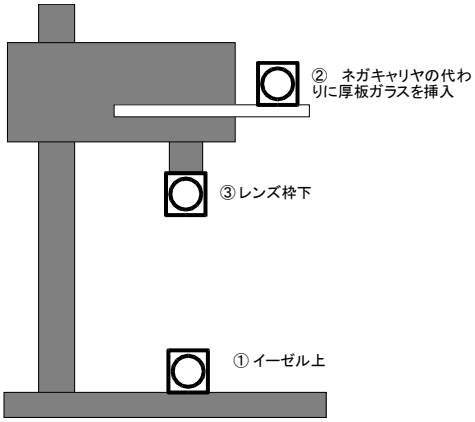


弧をえがくように振ってはいけない。（液の攪拌が不十分になる。）



ステンレスリールはイギリス Hewes 社製が丈夫で良い。（日本では入手困難？）

・引伸し機のアライメント（平行調整）方法解説： 厚めのガラス板と水準器を用いて、イーゼル、ネガキャリヤ、レンズの平行を確認する。 調整の出来ない引伸し機では、ネガキャリヤの挿入溝やレンズボードにフィルム片などを利用したシム（shim）を挟んで補正する。 引伸し機の調整はレンズのブランドにこだわるより重要だ。



・ネガの整理方法： ネガは日付順に整理するのが良い。ベース面の余白に日付と撮影順の番号、データなどを記入しておけばコンタクトプリントで一覧できる。 データ記入は STAEDLER の Pigment Liner 0.1（日本の文房具店で入手可能　200 円程度）がよい。

4×5 ネガはポリエステルのスリーブに入れ、カード整理用の箱に保管する。

最後にアダムスの作品解説：

Mount Williamson, Monolith のストレートプリントと完成プリントを比較。

Moonrise, Hernadez はネガの複製、ストレートプリント、完成プリントを並べて比較。 薄いネガからのストレートプリントはコントラストが低く、月の印象が薄い。空の雲もぼんやりした印象で見慣れた完成プリントとの違いに皆が驚く。

午後1時過ぎ、解散！

＊＊＊

文字通り朝から晩まで精力的に話し、かつデモンストレーションするワークショップは期待以上に密度が高く刺激的であった。 実証的なテクニックの教え方、そして必要なテクニックや道具は自分で工夫し、それを積極的に公開するという態度はいかにもアメリカ的実践重視の方法論だと感心した。

＊＊＊

日曜の午後、天畠氏は仕事の都合で早々にシアトルへ発ち、自分ひとりで Carmel by the Sea の写真ギャラリー巡りに出かけることにする。

モテルからカーメルへはタクシーで２～３０分。 ギャラリーやおしゃれな店が点在する小さい海辺の町だが、日本の観光地のような俗っぽさは全くない。

真っ先に Weston Gallery へ向かったが、日曜と月曜は休廊。 事前の調べでは火曜休みのはずだったが．．．

Center for Photographic Art は公民館（Sunset Cultural Center）の一隅にあるギャラリー。 センター賞の受賞作展示中で、日本からも細江賢治氏ほかの出展があった。 現代アートとしての写真が中心にセレクトされているようだ。 訪れる人も多くはなく、

受付に座っていた上品な老婦人が丁寧に案内してくれるが、あらためて自分の語学力の限界を感じる結果となった。

最後に件のご婦人のお薦めでPhotography West Galleryを尋ねる。 アダムスのほか、ブレット・ウェストン、ルース・バーンハード、ポール・カポニグロなどが取り扱いの中心である。みやげにブレット・ウエストンなどのポストカードを買う。

日も傾いてきたので海岸まで歩き、遮るもののない太平洋に沈む夕日を眺めることにした。

＊＊＊

これから参加したい人への参考情報:

今回は偶然、英語に堪能な方が日本から参加されたのでずいぶん助かった。 できれば二人程度で申し込むほうが心強く、また宿泊費も割安になるだろう。

時間に余裕があればカーメルやモントレーのギャラリー巡りなど、見るべきところは多い。

1　費用の概算

・ワークショップ参加費　　$700
・宿泊費（Hidden Valley Inn）約 $400
（ワークショップ割引・相部屋$58×6 泊＋α）
・航空運賃　　約 ¥95,000
（成田⇔モントレー空港往復　サンフランシスコ経由　ユナイテッド航空　HIS手配）
・飲食　　約$10～20×4 食分
（ワークショップ中にレストランで食事）
・タクシー代　　約$30×往復
（モントレー空港－ホテル間　チップ別）
・レンタル携帯電話（Gコール）　　約¥11,000
・その他 （旅行保険など）

・ワークショップ参加者にはセクストンのプリント、写真集などを割引販売する。
例） 11×14 プリント　$400＋送料$40 （但し数種類のみ）

2　今後のワークショップ　スケジュール

http://www.johnsexton.com/schedule2004.html　参照

THE EXPRESSIVE BLACK AND WHITE PRINT
April 20-25, 2004
November 2-November 7, 2004
February 1-6, 2005
February 15-20, 2005
March 29-April 3, 2005

3　フィルムのＸ線対策

フィルム（ISO 100）を郵送と機内持ち込みの二通りで送ったが、どちらもＸ線検査のダメージを受けなかった。

郵送　・・・　国際郵便（EMS）で 3 日程度で着く。 炭疽菌事件以来、郵便物もＸ線検査を行うということだが影響はなかった。

空港のハンドチェック　・・・　フィルムを透明ビニール袋に入れ、機内持ち込みで”Check by hand, please”と言えば大体応じてくれる。 成田出国時は一瞥するだけでノーチェック。

サンフランシスコでは分析装置を使って入念に検査される。 モントレーでは「ISO100 は影響ない」と言って一回だけＸ線を通されてしまった。